

テレビドラマにおける「シスターフッド」表象 の変遷

～テレビドラマが描く女性同士の連帯を分析する～

谷 実咲

#MeToo 運動の拡大を背景に「シスターフッド(sisterhood)」を題材としたメディア作品が世界的に流行している。「シスターフッド」とは元々は「女性同士の連帯・親密な結びつきを示す概念」として第二波フェミニズムの中で掲げられた用語であったが、現在は女性同士の関係性を示す言葉として多義的に用いられている(『岩波 女性学事典』, 2002, p.171)。日本のテレビドラマにおいても「シスターフッド」を描く作品は近年増加の一途を辿っている。そこで本稿では、日本のテレビドラマにおいて「シスターフッド」はどのように描かれてきたのかという問いに取り組むことを目的とした。

第 1 章では、女性像の生産におけるメディアの影響力を確認した上で、本稿に関連したテレビドラマ研究のレビューを行い、テレビドラマとそこに描かれる女性像が 1950 年代後半から 2020 年前後に至るまでどのように変遷してきたのかを報告した。加えて、関連研究は分析対象の選定理由が不明瞭であること、また関連研究の分析対象が家族の一員としての女性の姿や女性の仕事への取り組み方、恋愛や結婚への向き合い方に集中していることを指摘した。

第 2 章では「シスターフッド」の概況と題して、「シスターフッド」はどのような経緯で登場したものであったのか、日本においてどのように浸透したかを報告した。その中で、「シスターフッド」がメディアにおいては多義的に用いられていることを示し、本稿における「シスターフッド」を定義付けた。加えて、各メディアにおけるシスターフッドの表象に関する研究や論考を調査した結果を示し、「シスターフッド」を描いたテレビドラマの全体的な傾向がまだ示されていないことを明らかにした。

第 3 章では、量的分析を通して「シスターフッド」を描く作品は 1960 年代に既に存在していたことや、それ以降「シスターフッド」を描く作品の数は右肩上がりに増加していること、2020 年前後には「シスターフッド」がテレビドラマのテーマとして定着しつつあることを示した。また、「シスターフッド」を描く作品にみられる女性たちの関係性は、仕事に纏わるものとそうでないものの 2 つに分けられ、

後者はさらに「何かしらの仲間」と「友人関係」の 2 つに分類することができた。

第 3 章ではさらに内容分析を行った。その結果、各時代に人気のあった作品が描いた女性たちの苦しみ・悩みは時代に伴って変遷しており、逆に連帯のあり方については 4 つの共通点がみられることが明らかになった。「シスターフッド」の関係性にある女性たちは、職場に対する不満や恋愛観、結婚観など様々なものを共有し合い、互いの気持ちを理解した上で各々が生きたいように生きられるよう後押しをしあっていた。また、考察では、テレビドラマにおける「シスターフッド」というジャンルの成立過程や作品内容と社会の相関関係、また「シスターフッド」表象にみられる新展開や男女間の連帯を描く作品の背景に何があるのかを検討した。

考察にて、「シスターフッド」というジャンルがトレンドドラマとの対照的な関係を保ちながら確立されてきた可能性を示したが、実際、トレンドドラマは若者の仕事や恋愛を描いていたのに対して、「シスターフッド」を描いたドラマは恋愛や結婚をしない生き方を楽しく描き、視聴者に生き方の選択肢を提示していた。岩根(2021)が「生きている時間も場所も、画面のこちらかあちらかも超えて、連帯は続く」と表現するように、「シスターフッド」を描く作品は女性同士の連帯をただ描いただけでなく、視聴者をもその連帯の輪に入れていたことが窺える(岩根, 2021, p.211)。

なお、本稿の内容分析では、「シスターフッド」を描く日本のテレビドラマの中ではなく日本で放送されたテレビドラマの中で上位にくるような人気作のみを対象とし、その 13 作品にみられる共通点を明らかにした。その結果、「シスターフッド」を描く作品として有名な『問題のあるレストラン』(フジテレビ, 2015)や『監獄のお姫さま』(TBS テレビ, 2017)が分析対象から外れてしまった。その 2 作品は『GALAC』掲載の対談で西森が「フェミニズムを描いた作品」と表現するように、フェミニズムを感じ取りやすい構図の物語である(西森, 2021, p.19)。一方、本稿の対象となった作品はほんのりとフェミニズムを感じられるものが多い。フェミニズムを強く押し出す作品と本稿が対象としたような作品の比較など、今後の研究によって「シスターフッド」を描く作品の間にみられる違いが明らかにされることを期待したい。

参考文献

井上輝子他編『岩波 女性学事典』岩波書店、2002 年

岩根彰子「画面の向こうとこちらをつなぐ“シスターフッド”」、青弓社編集部編『「テレビは見ない」というけれど エンタメコンテンツをフェミニズム・ジェンダーから読む』青弓社、2021 年、p.195-211.

西森路代「対談 テレビドラマとダイバーシティ フェミニズム、性の多様性をナチュラルに描く時代」NPO 放送批評懇談会編『GALAC テレビとラジオの批評』2021 年 2 月号、2021 年、p.19-23.